

新・津の街探訪

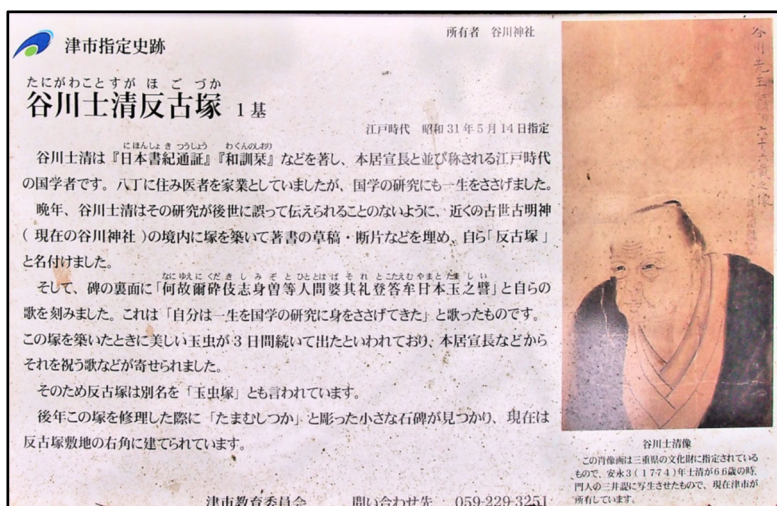
(第1回)国学者:谷川士清(国史跡 谷川士清旧宅)

谷川士清(たにがわことすが)、市民としては残念ですが、全国的にはあまりなじみのある名前ではありません。三重県では、知る人ぞ知る有名人、町医者でありながら、日本初のあいうえお順の国語辞典をつくった国学者です。現在、谷川士清の旧宅が改修されて、一般公開されています。たまたま、津高46年卒の井ノ口氏が、4月から旧宅の管理人の一人になられたことをきっかけに、6月末日に訪ねました。



実は、恥ずかしいことですが、そのとき初めて聞いて「反古塚」が近くの谷川神社にあることが分かりました。書き損じなど反古ができた場合、多くは焼却したりしますが、それを大切に埋めることは、そうそうないかと思います。谷川士清旧宅で、反古塚の理由を聞くと、なるほどと思います。士清は、晩年の安永4(1775)年に「反古塚」(現:市指定史跡)を建てています。これは、後世に自分の説が誤って伝わることがないように、これまで自分が書いて不用になったメモや下書き(反古)を埋めたということです。本人が詠んだとされている反古塚裏面に刻まれている歌は判読が難しいですが、解説が書かれた案内板が近くにありました。

全国で、どれくらい反古塚があるのだろうかと調べてみたら、ネットで公表されているのは数件でした。なんと、津市にもうひとつ反古塚がありました。それは芭蕉翁の反古塚です。芭



蕉はだれしも知る有名人。江戸から伊賀へ帰郷のたびに榊原温泉を訪れていたようです。芭蕉が亡くなると間もなく、芭蕉を敬慕してやまない地元の俳人らによって、かつて芭蕉がこの地で俳諧をした際に出た反古を埋めるため、湯治場の一角に反古塚を建てたとされています。明治後半に県道改修で観音堂とともに少し移動し、今は榊原町射山神社境内に移転しています。

パソコンが急速に普及したいま、手書きをすることは少なくなりました。電子機器では草稿から原稿を完成させる過程は、ふつうの場合は残りません。しかし、反古にした草稿のなかには、書き換えた原稿より良いものも少なからずあります。複数人で原稿を作り編集していく場合は、変更履歴を電子的に残すことはしていますが、常ではありません。ところが誤解を生む情報がネット拡散すると反古にもできず、いつまでもネットの中を漂い、時には、犯罪に巻き込まれるイヤな時代です。ネットの中で、だれにも見られない反古塚が欲しいと思う人が多いのではないのでしょうか。

現存している「反古塚」は後世の関係者や地域の人が建てたケースが多いなか、土清自身が反古塚を建てています。自分で建てたのは土清だけではないのでしょうか。後世に自分の説が誤って伝わることはないようにするなら証拠を残さないのが一般的、特に、当時、国の体制などの批判であったとするなら、危険なこともあり抹消しますよ。しかし一方で、自分の説は「正しい」と信念を持ちながら公表に躊躇、ある意味



「こだわり」があって、いつかは見て欲しいと思い「保護塚」にしたかったのかも分かりません。こだわりが強くなければ日本を代表する学者にはなれなかったかも。土清ってどんな人だったのでしょか。江戸時代を代表する本居宣長と並び称される国学者です。津では、土清をモチーフにした和菓子「ことすが」が八町のムッシュコウノヤで古くから販売されています。また、旧宅のほぼ隣の大岡屋にも「ことすがまんじゅう」があります。「ことすがまんじゅう」は、安くてあっさりした温泉まんじゅう風味でおいしいです。知ってましたか？



士清は、宝永6年(1709)八町で町医を営む谷川義章の長男として生まれました。幼い頃から家業を継ぐため幅広く勉学に励み、宗家福井丹波守により医師免許を受け、享保20年(1735)8月に津に帰郷しました。医者としての「養順」、号を「淡齋」と称して町医者として地域・近郊の人々から信頼を受けていました。旧宅の玄関を入ると、今は右手に受付があります。この奥が診察室だったそうです。医業のかたわら、家塾「洞津谷川塾」を開き、また近隣に「森陰社」(振々霊社)という道場を設け、多くの人々を教えたといわれています。

士清の著書として、日本書紀の注釈書「日本書紀通証」(全35巻:宝暦元(1751)年)があります。特に第1巻附録の「和語通音」は動詞の活用図表で本居宣長はその学識にうたれたそうです。そして、わが国最初の「いろは順」でなく「あいうえお順」の国語辞典、「和訓栞」(全93巻)をまとめたことが挙げられます。実際は初めの2文字が50音順となっていますが、3文字以降はやや不揃いとの話でした。一部分に漢字(子、井)が使われているのも興味深いです。確かに、手書きで整理するのは大変だと思います。いまは、エクセルのソート機能で簡単に並び変わりますが、当時、そのようなツールはありません。特に終盤に近づけば近づくほど、言葉を一つ追加するとなると、いやになったのではないのでしょうか。ミスもできない集中力、神業です。これらの資料は奥右手の座敷に展示されています。しかも、すべて「本物」です。ぜひ、士清旧宅を訪ね、その目でご覧ください。

請	斬	悔	産	言	往	立	指	書	遇		
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	キ	ア	<small>「御歌順」</small>	
井	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	<small>「御定本」</small>	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ク	ウ		<small>「御定巳」</small>	
エ	レ	エ	メ	ヘ	子	テ	セ	ケ	エ	<small>「御人告」</small>	
オ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	ヲ	<small>「御書目」</small>	
之妙爾	不用之是自然	詠歌讀書古今	韻皆非雅語故	也蓋第五之十	取通音非正義	首尾遇請兩韻	以發揮其義但	今借魁癸十字	自有音韻次序	今按倭語活用	
<small> 是れ自然の妙なるのみ。 書には古今之を用ゐず。 雅語に非ず。故に詠歌・讀 取るは、正義に非ざるな り。蓋し第五の十韻は皆 首尾遇請の兩韻に通音を 其の義を發揮す。但し 今借癸の十字を借り、以 今態芸の十字を借り、以 今按ずるに、倭語の活用 に自ら音韻の次序有り。 今借癸の十字を借り、以 今態芸の十字を借り、以 今按ずるに、倭語の活用 今按ずるに、倭語の活用 </small>											



谷川士清 略年譜			
西暦	年号	年齢	事蹟
一七〇九	宝永 六	二一	二月二十六日、伊勢国安濃郡八町（今の津市八町三丁目）に生まれる。
一七〇九	宝永 六	二一	京都に遊学し、松岡玄達に儒学、本草学を学ぶ。
一七一〇	宝永 七	二二	松岡仲良に入門し、形加神道を学ぶ。ついで、その師玉本正英につく。
一七一〇	宝永 七	二二	小笠原家から生花許状を受ける。
一七一〇	宝永 七	二二	玉本正英から神道許状を受ける。
一七一〇	宝永 七	二二	京都山下氏と結婚する。
一七一〇	宝永 七	二二	医学『蘭語異同弁』、『熱入血室之弁』を著す。
一七一〇	宝永 七	二二	婦醫し、別津谷川塾、森蔵社を開く。
一七一〇	宝永 七	二二	家業の医者を継ぐ。
一七一〇	宝永 七	二二	嗣子士逸が生まれる。
一七一〇	宝永 七	二二	玉本正英の『神代巻』、『神武巻』、『神皇正統記』を森蔵社において刊行する。
一七一〇	宝永 七	二二	長女八十子生まれる。
一七一〇	宝永 七	二二	『日本書紀通鑑』の草稿がほぼできる。
一七一〇	宝永 七	二二	『蘭語通鑑』の草稿ができる。
一七一〇	宝永 七	二二	『日本書紀通鑑』三巻がすべてできる。
一七一〇	宝永 七	二二	有栖川職仁親王に和歌入門を願ひ、入門を許される。
一七一〇	宝永 七	二二	表山下氏がじくなる。
一七一〇	宝永 七	二二	正親町実達『日本書紀通鑑』の序文を書く。
一七一〇	宝永 七	二二	継妻として、京都の医師松木氏の女大江を迎える。
一七一〇	宝永 七	二二	竹内式部、宝曆事件によつて追放され、伊勢に来る。
一七一〇	宝永 七	二二	運業商賈が入門する。
一七一〇	宝永 七	二二	野田で銅鑄が発掘されたことを聞き、入手する。
一七一〇	宝永 七	二二	長女八十子が運業商賈と結婚する。
一七一〇	宝永 七	二二	父頼端がじくなる。
一七一〇	宝永 七	二二	本居宣長から初めて手紙を受ける。
一七一〇	宝永 七	二二	孫士行が生まれる。
一七一〇	宝永 七	二二	『勾玉考』の草稿ができる。
一七一〇	宝永 七	二二	学友竹内式部、明和事件に連座し、宇治藩、頼氏方で幕史に捕らえられる。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』の草稿を本居宣長に送る。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』の編者につとめる。
一七一〇	宝永 七	二二	『説大日本史記』を著す。
一七一〇	宝永 七	二二	『勾玉考』を出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	門人三井誠（丹丘）が肖像画を描く。
一七一〇	宝永 七	二二	古世子明神境内に反古塚を築く。（現 谷川神社）
一七一〇	宝永 七	二二	自宅の修築を行う。
一七一〇	宝永 七	二二	士逸が追放される。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』前編の出版準備に専念する。
一七一〇	宝永 七	二二	十月十日、逝去し、福蔵寺に葬られる。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』前編一三巻を出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』前編一四巻から二八巻までを出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』前編二九巻から四五巻までを出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』中編三〇巻を出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』後編一八巻を出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	『和調泉』洋装本三冊を出版する。
一七一〇	宝永 七	二二	従四位を追贈される。

谷川士清生誕 300 年記念事業

<https://www.info.city.tsu.mie.jp/www/contents/1001000011148/simple/20505.pdf>

<https://muse-tsuchity.sakura.ne.jp/tanikawa.html>



津市：谷川士清旧宅施設案内

<https://www.info.city.tsu.mie.jp/www/contents/1001000011073/index.html>



観光三重

https://www.kankomie.or.jp/spot/detail_4682.html

文：白井靖敏、井ノ口岳彦、古川孝子

問い合わせ：教委生涯学習課 電話番号 059-229-3251

開館時間：9 時から 17 時まで（入館は 16 時まで）

休館日：月曜日、国民の祝日の翌日、年末年始（12 月 28 日から 1 月 3 日まで）

入場料：無料

駐車場：なし。近隣の公共施設を案内

所在地：津市八町三丁目9-18 近鉄津新町駅より 1.4 キロメートル

津高前より北へ 400 メートル（津高旧寮跡地からすぐ）